Interview

相談未満のやりとりから関係をつくる
～相談窓口「応援ライン」の取り組み～

NPO法人「なごやかサポートみらい」　蛯沢光さん

進学応援金を受ける学生が悩みや困りごとを相談できる窓口として「応援ライン」を開設しました。この窓口はスマートフォンアプリを使って気軽に相談することができます。相談に対応するのはNPO法人「なごやかサポートみらい」の蛯沢光さんと水野梨沙さんです。社会的養護のもとで育った経験があり、現在は子どもたちの支援をしている2人が必要に応じて適切な援助につなげます。

2020年夏から相談窓口をスタート

NPO法人なごやかサポートみらい理事長の蛯沢光です。私たちの団体は愛知県名古屋市を中心に、児童養護施設や里親家庭等で暮らす子どもへのサポート活動、施設を退所したあとのアフターケア、社会的養護に関する情報発信などをおこなっています。

朝日新聞厚生文化事業団さんとの関わりは10年以上になります。進学応援金事業の新しい取り組みとしてSNSを使った相談窓口の開設を提案いただいたのが2020年の春頃でした。コロナ禍で人との交流や対面での会話が難しい状況もあり、学生の精神的なサポートをする役割として私たちが対応することになりました。

応援ラインの相談は曜日や時間の制約を設けていません。役所や病院と違って「いつでもどうぞ!」というスタンスでやっています。2020年6月にスタートした当初は20人くらいの学生が登録して、2021年3月時点では57人が登録をしています。寄せられた相談には必ず返事をするようにしていますが「最初はそんなに相談はこないだろうな」とも思っていました。学生たちは人に相談するよりも自分で問題を解決しようとする傾向があります。かつての私もそうでした。私自身も7歳から18歳まで児童養護施設で生活した経験があります。

児童養護施設で育ったからこそ共感できる

私の場合、親の経済的な事情から児童養護施設に預けられました。施設から大学に進学したという点では、進学応援金を受けている学生の先輩のような立場です。1986年生まれの私と今の学生では状況が異なる部分もありますが、社会的養護で育った当事者として、心のうちにある思いや葛藤は共感できる部分があります。

私の大学時代はものすごく忙しい日々でした。学費と生活費を稼ぐためにアルバイトを5つくらい掛け持ちしていたので、親から仕送りをもらっている同級生を批判的に見ていました。働きすぎて大学に行けず、自分のことだけで精一杯で、自分が一番大変だと思いこんでいました。当時の私は相談ラインに連絡しないタイプです。弱音を吐きたくないし「自分でやらなきゃ、自分で頑張らなきゃ」と思い込んで無理を重ねました。

大学2年の時に身体を壊して、どうにもならない状態になって初めて人を頼ることができました。「えびちゃん、協力するからさ!」と言ってくれた人たちが頑なになった心をほぐしてくれました。なんでも自分でやることが自立はなく、人に頼らせてもらいながら主体的に生きることが自立です。それがわかるまで時間がかかりました。

頑張ってきた学生ほど人に頼るのが苦手

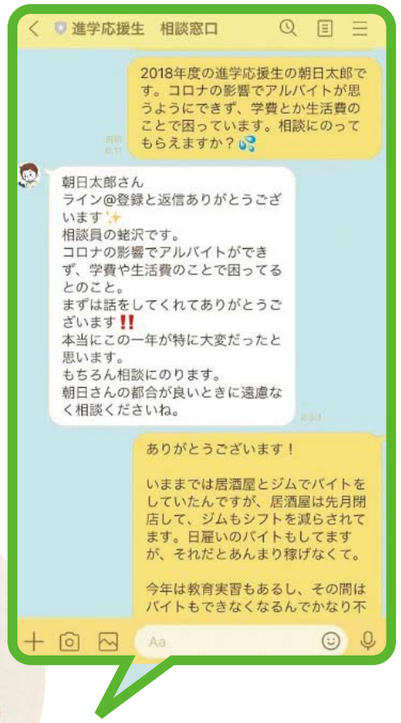
こうした苦い経験があるからこそ、私は相談することの難しさを知っています。この10年くらいの間に奨学金制度などは充実してきましたが、それでも社会的養護から大学に進学するハードルは高いです。頑張ってきた学生だとわかっているので、応援ラインには私から”話のきっかけ”を送り続けています。それは私自身の近況であったり、学生時代の話であったり、2歳半のうちの息子の写真だったりします。結局は”人”なんです。「困ったことがあったら相談してね」と待つよりも、自分のことを伝える方が学生からの反応があります。

たわいもないやりとりから「学校でしんどいことがあった」とか「人間関係で悩んでる」など、相談未満のやりとりもたくさんあります。何気ないコミュニケーションの必要性を事業団の人たちも理解してくれています。学費や生活費などの金銭的な問題について踏み込んだやりとりが必要な場合には、ZOOMを使ってオンライン面談に対応することもありました。内容によっては女性の相談員に対応してもらうこともあります。

頑張っている学生ほど人に頼ることができず、自分で抱えすぎて崩れてしまいがちです。身の回りに頼れる人がいるならそれでいいのですが、お世話になった施設職員や里親の親心がプレッシャーになることもあります。「もうやめたい」と思うこともあるでしょう。社会にはいろいろな選択肢があるので、どの選択をするにしても自分事として考えることが大事だと思います。

応援されている実感が力になる

私が「もう限界だから大学をやめたい」と思ったときに、頭に浮かんだのは施設にいたときに出会った職員さんや寄付や応援をしてくれた人たちの顔です。進学応援金も多くの人のご寄付で成り立っています。多くの人が自分を応援してくれていると実感できることは本人の力になります。大事にしてもらった経験があれば、他者を大事にできる大人になれます。自分は施設の人に大事にしてもらい、あたたかく接してもらい、応援してもらってここまできました。今は応援する側になりました。さまざまな苦難を乗り越えてきた学生たちが、自分の未来に向かって進んでいけるように。共に見守り応援をいただければ幸いです。



（インタビュー・構成：井上エリコ）